

No.3009

清朝国家と漢人軍閥—「華夷変態」下の東アジア世界

東京大学 総合文化研究科 博士課程

林 慶俊

16世紀から17世紀にかけての時期、ツングース系のマンジュ Manju（満洲）人の建てた「大清 Daicing」すなわち「清朝」は、在来の諸勢力のほか、新たに支配下に入った漢人軍閥、モンゴル諸部など軍閥を、自らの政治秩序に組み入れ、組織化・戦力化していた。本研究で取り上げる三順王とは、清に参画した代表的な漢人軍閥であった。彼らは、もともと明の武将で、麾下を率いて大清に帰国してからは対外遠征に従軍し、その実力と軍功を認められ、本来、帝室のみの特権である王爵を授与され、降清漢人の筆頭格の存在として厚遇された。では、彼はいったい如何なる麾下を率いて活躍していたのであろうか。また、彼の軍閥は、大清国家において、どのように位置づけられていたのであろうか。そこで、三順王の筆頭をなしていた孔有徳の率いる定南藩をとりあげ、次のような成果を得た。

明末清初期の軍閥勢力として登場した孔有徳軍閥は、毛文龍勢力に淵源を持つ遼人を戦力化・組織化して結成された。彼らを組み込んだ大清国家にとっても、その充実した軍事力と整然とした編制、そして火器・船隻を兼ね備えた軍事集団としての側面が高く評価された。その規模は、戦闘員だけでも八旗ならば2・3旗に相当しており、これこそ、孔有徳が清側に破格の優待を受けた主因であった。帰国以来の孔有徳軍閥は、八旗官制に即した組織改編を経て、最終的には定南藩として位置づけられるが、軍閥の中核部は、在来の古参武将とその家系成員が固定的に保ち続けた。孔有徳一家もまた、大清帝室と様々な関係を構築することで、藩王の地位を固めていた。しかし、三藩の乱の結果、叛乱に同調したという罪を問われ、定南藩は遂に終焉を迎え、その軍閥は解体され、八旗漢軍へと編入されるに至ったのである。

以上より、清朝国家と漢人軍閥との関係を、単純に対立的に捉えることはできず、少なくとも三順王～三藩は、形式上では、清朝国家を構成する下位王権として位置づけられていたこと、そしてその意味で、大清政権下の漢人軍閥は、一定の外的規制を受けながらも、従来の支配関係に基づく所領支配と権力行事を引き続き保証される、自律と支配のバランスの上で国家的統合をなしていたことが明らかになった。